

# 都

心からレインボーブリッジを進むと、右手にある印象的な建物が目に入る。2棟の建物が中空を渡る廊下で結ばれ、間には銀色に輝く球体が浮かぶ佇まいだ。フジテレビが開局から38年間放送を続けた新宿区河田町の社屋から、港区台場にあるこの建物に移転したのは、16年前の1997年3月のことだった。社員と制作会社のスタッフをあわせると、数千人に及ぶサラリーマンたちが引っ越した格好だ。

6年後の2003年、跡地にはURが開発を担った「河田町コンフォガーデン」が誕生し、まちはサラリーマンにかわって新たに数千人の居住者が出現した。河田町は「人々が働きに来るまち」から「人々が住むまち」に変貌を遂げた。新しい居住空間の出現により、子育て世帯も一気に増加する。

## ◆地域の母親が子育て支援を担う

近隣地域にも子育て世帯は少なくなく、新たな住民の流入で子育て

とって貴重なものになる。

河田町近辺のマップはあるにはあったが、情報が古かったのでミマモカフェで作成直すことにした。古味さん自身がより充実した情報を提供したいと考えたのは、出産後に満足できる情報がなくて苦労したからだ。古味さんはカフェを訪れる母親たちの参加を募り、マップの製作を始めた。カフェの参加者にデザインの経験とスキ

ミマモカフェがある河田町コンフォガーデン



# 子育て中の母親の意欲を支援

## 東京・河田町コンフォガーデン

(2003年・平成16年)

新田匡史

につた・まさお

illustration: Shigeyuki Sakata



変わる日本の「暮らし」と「まち」

14

て支援は手薄になった。団地の価値向上を目指すURは、新しく誕生した団地に子育て支援施設の誘致を模索する。相談したのは、神楽坂で子育て広場を運営するゆつたり〜の(代表・小原聖子さん)だった。

紹介されたのは近隣に住む子育て中の母親たち。UR担当者とは母親たちは、何度となく打合せを重ね、コンフォガーデン集会所での子育て広場の運営を決めた。その名は、ミマモカフェ(代表・佐々木綾子さん)。運営を引き受けるのは、4歳の子を育てる古味利絵子さんらだ。

カフェは親子であふれ、滑り出しは好調。だがひとつ問題があった。集会所が子育て広場の利用を想定していないことだ。UR担当者は訪れる親子が安心かつ快適に過ごせるよう、母親たちの意見を聞きながら改修を行った。ドアの指はさみ防止、弾力性のあるパネルカーペットの敷設、授乳スペースとベビーカーの設置などを施

した。

「URさんが改修してくださったおかげで、スタッフのモチベーションが上がりましたね」

ハード面も整ったミマモカフェの存在は口コミで広がった。コンフォガーデンの住民のほか、近隣に住む子育てママも増え、地域のコミュニティの核として存在感を見せ始める。参加した母親から「近くにこういう場があつて嬉しい」「この先もずっと開いてほしい」という声があがる。スタッフは運営への手ごたえを感じた。

ミマモカフェでは、参加する母親たちが、プレーヤーとして参画することが可能だ。そのひとつが手づくりの子育てマップづくりだった。

幼い子を持つ母親の行動範囲は極端に制限される。子供を連れてたった数駅電車に乗るのも一苦労だ。子育てに必要なものを揃えられる場所、子連れでも気兼ねなく行ける場所などの情報は、母親に

ルを持った母親がいて、古味さんらは彼女の力を生かそうと巻き込んだ。参加している母親からお店や病院の情報を集めた。苦労の末、充実した情報はもちろん、見た目も美しいマップが仕上がった。

だが再び難題が持ち上がる。ミマモカフェには用紙代や印刷代を捻出する予算が足りなかった。古味さんは、掲載先から広告費を集めることを思いつく。そこで出産前に培ったキャリアを生かして営業に走る。写真の著作権管理会社に勤務し、退職後はご主人の会社の立ち上げを支えた経験から、高い涉外スキルがあったのだ。その結果、広告費も集まり無事子育てマップの配布にこぎつけた。そのクオリティは高い。最近ではマップに掲載してほしいという店が続出するまでになった。

## ◆キャリアを生かした社会貢献を

一般的に、子育て支援は子育てに悩む母親の心理的負担を軽減す

るものというイメージが強い。だがミマモカフェは子どもを預かるだけでなく、子育て中の母親が自らプレーヤーとして何かに取り組む場としての色彩が濃い。

というのも、ミマモカフェを訪れる母親は30代後半から40代が多く、メーカーの営業や司法書士などキャリアを重ね、出産を機に会社を辞めた母親が中心だ。単に子育ての悩みを解決するためにカフェに来てはいるわけではないと古味さんは感じている。

「せっかくキャリアを積んでも生かす場がないんですね。カフェには、それでも何かしたい、社会とつながって貢献したいと考える母親が多いと思うんですよ」

元女医であれば、子どもの急病対処講座ができるかもしれない。化粧品店の元美容部員ならメイクアップ講座ができるかもしれない。ミマモカフェでは母親たちのキャリアを生かした講座の開設も可能だ。

さらに、古味さんには温めてい

る構想がある。育児休暇中の母親が職場復帰をする前に「脳トレ」でリハビリをすることだという。「産休中の母親は、どうしても子育ての脳になってしまいます。そのまま職場に戻っても、すぐに仕事モードへ切り替えるのは難しいんです」

この脳トレは、育児休暇中の母親のスムーズな復帰を支える社会貢献になる。

支援を受けるために参加するだけでなく、スタッフや講師として支援を提供するプレーヤーにもなる。URと母親が併走して作り上げたミマモカフェは、子育てをする母親が、自らのキャリアを生かしながら社会貢献をしたいという思いを実現できる場である。参画する母親の輪が広がれば、新しい形の子育て支援が生まれていくのではないだろうか。

街に、ルネッサンス



[企画制作] 新潮社